

## 赤ん坊を拾った話

作者…蘇童（そ・どう）【Su Tong】一九六三年、江蘇省蘇州生まれ

訳者…齋藤晴彦

原題…〈拾嬰記〉

初出…《上海文学》二〇〇六年第一期

テキスト…蘇童《短編小説編年卷五・垂楊柳二〇〇〇至二〇〇六》人民文学出版社、二〇〇七年

一

柳の籠が夜の闇に紛れて羅文礼家の羊困いに舞い降りた。

牝羊は驚いて目を覚ました。牝羊の限られた知恵は、今まで遭遇したことの無い壁にぶち当たった。柳の籠は湿った若草の香りを放っていたが、中に盛られていたのは夜間の餌となる草ではなく、夜露に湿った女の子用の綿入れ上着だった。上着は

藍の地色に黄色い花模様のコーデロイ生地で、教輪のヒマワリがむらなく散りばめられている。牝羊は見知らぬ人がヒマワリの山を送ってきたのかと思ったが、よく覗いてみると、なんと赤ん坊の小さな顔が見え隠れしている！ヒマワリも赤ん坊も餌ではない。だが、牝羊はしつこく柳の籠の傍に留まり、鼻をクンクンさせて赤ん坊の体から漂う淡い香りを嗅ぎ分けていた。牝羊は、その香りから春の早朝の草原を思い浮かべ、更に、

夏に河辺で離ればなれになった一頭の子羊を思い出した。

上着の教輪のヒマワリは、すやすや眠る赤ん坊を守り続けているかのようだった。ヒマワリは暗闇の中で、黄金色の光を四方に煌めかせ、牝羊と真っ向から対峙していた。ヒマワリはあっという間に勝利し、弱腰の牝羊は羊困いの主人という権利を棄てて、隅の方へと逃げ隠れた。

その夜、楓楊樹郷の犬たちは、あちこちでひとしきり吠えた。対岸の花坊鎮北部にいる犬たちは、それに応戦した。それは力比べの戦いであり、野性のブライドが込められていた。河の兩岸の犬たちは何かを聞いたからか、それとも、ただちょっとした義務を果たし終えたからか、すぐに静かになった。羅家の羊困いだけが、謎の迷宮のような雰囲気醸し出していた。

事件の目撃者は三頭の羊だけだ。その晩の月の明るさなら、羊たちは、捨て子をした人の姿を柵の隙間から見ただけだ。羊は耳も利くのだから、その人の足音がどこから来て、どこへ消えていったのかを必ず聞き分けることができたはずだ。惜しむらくは、目撃者が三頭の羊だったことだ。羊たちは、これまで一度も門番をしたことがなかったし、どんなことに対しても黙っているのが習わしだった。

羊がこれほど頑なに沈黙を守るのだから、羊の主人である羅文礼一家も追及のしようがない。仮に、渾水河兩岸の青草を全

て刈ってきたとしても、一頭の羊の心を買収することはできない。人の心は買収できるが、羊の口から秘密を吐かせることなど誰にもできやしないのだから。

## 二

彼らは手始めに柳の籠を家の前に置いた。なんだか遺失物取扱所のようだった。羅文礼の長男、慶豊は柳の籠を見ながらも心ここにあらずで、しゃがんだり、立ったりを繰り返していた。彼は大きなどんぶりを両手で捧げ持って粥をすすり、何口かすすっては大声で叫んだ。「こっちだ、こっちだ、ちょっと見てください、うちの羊困いに赤ん坊を放り込んでいったのは誰だ?」

男たちはみな朝早くから花坊鎮の監獄へ白菜を届けに行き、子供たちは学校に行っていたので、噂を聞きつけてやって来たのは、村のおばさんたちだけだった。彼女たちは、小走りで駆けつけてきた。まだ鎌を持ったままの人もいれば、毛糸と鉤針を肩から下げている人もいる。あまたの豊満な体とぼさぼさの髪が垣根となり、柳の籠を熱心に取り囲んでいる。後から来た人は、人だかりの隙間から籠の中にあるヒマワリを見ることができなかっただったので、地団駄を踏みながら慶豊に言った。「赤ん坊はどこよ? 見えないわよ。ヒマワリしか見えないじゃない

いのー！」

先に来ていたおばさんたちは柳の籠の中にいる女の赤ん坊をじっくりと観察し、ぶつぶつ言った。「美しい女の子だよ、なんだって捨てたりしたのかね？ 捨てられても泣かない、見て、この子、なんと笑ってるよ」ある人がそっかしく慶豊に訊ねた。「どこの家の赤ん坊だい？」慶豊は目を大きく見開いて訊き返した。「それが分かっていたら、ここに置いて、あんたらに見学なんかさせるか？」おばさんたちは、慶豊の気性の荒さを知っていたので、彼を相手にせず柳の籠の傍らにしゃがみ込んでコソコソ話を始めた。ある人は言った。「血も涙もない親だ、どうして赤ん坊を羊囲いに捨てたりできる？ 大馬鹿者だよー！」

慶豊はどんぶりの縁を指で弾きながら言った。「あんたらこそ大馬鹿者だよ、何も考えずになんでもすぐ口にするんだから。こんな寒い日に外に捨てたら凍死しちまうに決まってるだろう。羊囲いはどうしたって？ うちの羊囲いは、あんたらの家よりも暖かいんだよ、何も知らねえなら、でたらめを言うな！」おばさんは振り向いて言った。「あたしらは何にも知らない、あんたは何でも知っている。そんなら教えておくれ、この子供はどうやってできたんだい？」

慶豊はあざ笑って言った。「あんた、これで俺を困らせたつ

もりか？ どうやってできたかだつて？ 男と女が×してできたんだよ！」

慶豊は成長し、多くのことに訳もなく苛立つようになった。

無駄口を叩くおばさんを見ると更に苛々する。彼は柳の籠を見守るのに嫌気がさしてきた。粥を飲み干すと、その場を離れて羊囲いの外まで歩き、母に向かって叫んだ。「自分で呼び集めてくれよ、俺はこんなにたくさん呼んだけど、野次馬ばっかりだ。誰も赤ん坊を引きとろうとしない！」

盧杏仙はすぐに家から出てきて、エプロンについた草の灰を払い落としながら言った。「あんたら、ちょっと見てごらん、これはいっただいというわけだい？ 朝起きて、羊の糞を片付けようと思つたら、この籠を見つけてさ、驚いたよ。あたしはこれまでずっと運が悪くてさ、一分銭フネネネネだつて拾ったこともありゃしないのに、なんだって急に子供を拾ったりするのさ。あたしの家が貧しいことは楓楊樹郷の誰もが知っているだろう。捨て子をした人は何を見てんだい、なんだって、よりによってあたしの家に捨てていくのさ？」

おばさんたちは、盧杏仙の言い分に黙って同意した。だが誰の家が裕福で、誰の家が子どもを捨てるのに相応しいかを明らかにして、彼女の怒りに油を注ぐわけにはいかない。おばさんたちはみな暗黙の了解のうちに遠く対岸の花坊鎮を眺めがやが



子犬や子猫を拾うのとはわけが違う。赤ん坊だって人なんだから、花坊鎮へ行って戸籍を登録しなくちゃいけない！」

「登録、登録って、あたしが知らないとも思っているのかい？」

盧杏仙はエプロンをタオル代りにしてズボンを叩いていたが、ふいに怒りを込めて片手を後ろへ振り出し、庭に置いてあった竹箒たけむしの上の乾し大根を指差した。「あたしには、そんな暇はないよ。あんたたちの家は漬け物が出来上がっているだろうけど、あたしの家の糞が、まだ全部ひっくり返っているのが見えないのかい？ まだ大根を漬ける塩だ買って買っていないよ。どうせ、うちの慶来チヂウライが花坊鎮に塩を買いに行かなきゃならない。誰もこの赤ん坊を引き取らないなら、慶来に道すがら役所まで届けさせるよ！」

### 三

朝九時、楓楊樹郷の少年である羅慶来ルキョウライは河を越え花坊鎮にやってくる。

羅慶来はあの柳の籠を提げ、花坊埠頭で船を降りた。埠頭では銅鑼や太鼓が鳴り響いている。白い上着に青いズボンを身に着けた人々が倉庫の前で銅鑼や太鼓を敲たたき、文化センターの役

人がメガホンを持ってリハーサルの指揮をしている。少年たちは、隊列の後方で赤い大きな太鼓を敲いていた。ひとしきり敲くとバチを高く振り上げ「毛主席、万岁！」と声を揃えて叫ぶ。少女たちは腰鼓こしづみを赤い絹帯で体に縛り付けている。彼女たちは輪となって踊りながら腰堤を敲いている。しばらく敲くと一斉に体を斜めにして「祖国、万岁！」と顔を天に向けて叫ぶ。埠頭を横切る多くの人々が立ち止まった。羅慶来も石段で立ち止り、しばらくそれを眺めていた。羅慶来は言った。「これで太鼓を敲いてるつもりか？ まったく音が揃っていないじゃないか」隊列のどこかで太鼓を敲いている学生の親と思われる男が、羅慶来に不満の目を向けた。「揃ってないだろ？ なら、おまえが敲いてみる」羅慶来の顔は訳もなく赤くなり、身を翻すように駆け出した。「おれは太鼓なんか敲かねえ。敲くならおまえらの頭だ！」

彼は柳の籠を提げていた。籠の中には、見知らぬ女の赤ん坊が入っている。赤ん坊は、奇妙なほど行儀が良かった。羅慶来はずっと赤ん坊を泣かせまいと気を配り、泣いたらどこか静かな場所を探してミルクをあげるつもりだった。だが赤ん坊は泣かない。泣かないので、彼は足を止める必要もなかった。母さんは、点滴用の瓶で作った哺乳瓶を籠に入れていた。瓶の中には温めた羊の乳が入っている。母さんは言った。「うんちはも

うしたから、もし泣いたらお腹が空いているからだよ。そうしたら羊の乳をあげるんだよ」羅慶来は、全ての赤ん坊は泣くものだとこのことを知っていた。彼はこの常識のため焦り不安になった。「この赤ん坊は泣けない、泣かない！」羅慶来は役所のある八一通りへ向かいながら、疑い深く籠の中の赤ん坊を見ている。荒っぽく揺れる籠の中で、赤ん坊は平然と前に進んでいく。血色がととも良いが、なんだか得体の知れない小さな顔には、頬一面に金色の柔らかな産毛が生えている。真っ黒な瞳がふいに開き陽の光を迎え入れたが、照らされると怯えたように瞳を閉じた。

「泣かない方がいいや、そうしてくれば羊の乳をあげなくて済むし。ありがと、女の真似事をしなくて済むよ！」陽光に照らされた赤ん坊の顔をじっくりと観察していると、彼の脳裏にふいに奇妙な考えが浮かんできた。「おまえは子羊にすごく似ているな。羊もおまえと同じで泣かないしな。ひょっとして、おまえって羊人間じゃないのか。おまえは草を食べるのか？」羅慶来は通り沿いの家の窓台に、菊が一鉢植えられているのを見た。菊は枯れていたが下草は青々と茂っていた。彼はそれを抜きに行った。抜くには抜いたが、彼はやはり躊躇し、草を食べるかどうか確かめてみようという考えを捨てた。羅慶来は草を柳の籠に放り込んだ。「冗談だよ、おまえはまだこんなに小

さいんだから、いじめたりするわけがないだろ？」

花坊鎮は半分新しく半分古い。古さの中にある静寂と荒涼感、碁盤縞の木製の窓と古い壁に生えた苔の後ろに隠されている。コンクリートの通りは絶えず賑やかだった。羅慶来は出来るだけ人が多い場所を避けていたが、やはり余計な世話を焼く人たちが柳の籠を追いかけてくる。「おい、籠の中に、なんかいいものでも入っているのか？」購買販売協同組合の前の通り過ぎる時、羅慶来は母に塩を買うように言いつけられていたことを思い出した。値段を見なくちゃ、これって五百グラム六分銭の塩か。彼は柳の籠をガラスの戸の外に置き、頭を組合の中へ突き出して塩甕の上にある小さな赤旗を見た。値段はよく見えなかったが、彼の背後にいたおばさんが驚喜して叫ぶ声が聞こえた。「この赤ん坊、なかなか賢いじゃない、でも、どうして自分の妹を籠になんかに入れてくのか、かわいそうに！」

羅慶来は言った。「誰がおれの妹だって？ この赤ん坊は羊だぞ！」

羅慶来は、そんな女たちと無駄口を叩きたくなかった。塩はどうせ帰りに買って買えると思つた。彼は籠を提げながら、八一通りへ向かって走った。杜さんの野外卓球場を横切つ時、彼の足取りは急にためらいがちになった。小学校で同じクラスだった羅小正が腰を曲げてそこに立ち、リズミカルに卓球を

している。羅慶来は腑に落ちなかった。いつの間に、こんなに上手くなったんだ。羅小正も彼に気付き、ラケットを振りながら気分よく言った。「こっちに来いよ、一緒にどうだ。卓球台を貸し切りにしたんだ、まだ一時間ある！」

彼は、ほぼ即座に無料の卓球をやるうと決めたが、唯一気がかりだったのは柳の籠のことだった。彼は笑われたくなかった。羅小正が「何を持ってんの？」と訊くと、羅慶来は口から出任せを言った。「塩だー」彼は前方をさっさと指さして言った。「ちよっと待ってくれ、籠を叔母<sup>⑤</sup>に渡してくるから」

無料の卓球はまだ一時間もあつたので、羅慶来はひどく焦り、鎮の役所に向かう時は、ずっと小走りだった。走りながら、彼は赤ん坊と哺乳瓶が柳の籠の中で左右に滑る音を聞いたが、赤ん坊は依然として哺乳瓶と同じく静かだった。ひよっとすると赤ん坊は泣く勇氣がないのかもしれないし、彼が走るのを楽しんでいられるのかもしれない。その後、羅慶来は花坊鎮の紅旗幼稚園の前を横切った。そこから聞こえてくるオルガンの音が彼の注意を引いた。彼は急に立ち止まると、心に大胆な考えが浮かんできた。捨て子をした、あの得体の知れない奴の口があるじゃないか。あいつは俺の家の羊囲いに柳の籠を捨てていったんだから、俺だって柳の籠を幼稚園に捨ててもいいじゃないか？ 羅慶来はこんなふうに見えるのと緊張した。四方に誰もい

ないか確認し、幼稚園の窓を押し開けに行くと、窓の向こうに空色に塗られた小さなベッドが整然と並んでいるのが見えた。正確に狙いを定めれば、ここから直接、籠をひっくり返して赤ん坊をベッドに放り出すこともできる。だが、折悪しく、窓は内側からロックされていたので、彼が窓を一押しすると、室内の幼児が一人、ワーッと泣き出した。すると、たくさんの幼児たちがよちよちとベッドから降り、彼の方を見た。保母は、彼が窓を押し開けるよりも早く大部屋へすっ飛んできた。

結局、窓に邪魔をされ、羅慶来は赤ん坊をベッドに放り出すことができなかった。彼はうろたえの余り、柳の籠を幼稚園の窓の下に置き、一陣の風のように逃げ出した。彼は、李おばあちゃん<sup>⑥</sup>の家の前を横切る時、彼女が痰壺を空けるために外に出てきたことに気付いていなかった。そのため、彼は振り上げた片腕で、李おばあちゃんが手にしていた痰壺を跳ね飛ばしてしまった。

李おばあちゃんは、羅慶来の姿をはっきりと見ることはできなかった。ただ無分別な少年が一陣の風のように走り去り、あつという間にどこかへ消えていくのを目にしただけだった。だが、そこにはなんだか怪しい臭いが残されていた。李おばあちゃんは、しばらく鼻をクンクンさせた。それは痰壺がひっくり返った臭いではなく、微かな羊の生臭さだった。

#### 四

李おばあちゃんは、幼稚園の窓の下に置き去りにされていた女の赤ん坊を見つけた。彼女は、窓の下に立ってガラスを叩いた。「はやく出てきな！ あんたら保母は一体どんなふうにご供を見ているんだい？ なんだって子供を外に放っておくのさ？」三人の幼稚園の保母たちは恐る恐る窓の前に押し寄せ、外の柳の籠をはっきり見定めると、皆ほっとして言った。「幼稚園の子供じゃないわよ！ ここの子供じゃないわ！」保母たちは、更に彼女を責めた。「李おばあちゃん、驚かさないでちようだい、ちゃんと見てから言ってよ。赤ん坊でしょ、せいぜい生まれて二か月ぐらいよ、ここでは三歳以上の子供しか受け入れていないの。赤ん坊はこれまで一度だって受け入れたことなんてないの！」

李おばあちゃんは、彼女たちが責任逃れをする様子を見かね口を歪めて言った。「なにが二か月、八か月だよ、幼稚園は子供を受け入れる場所じゃないかい。どうしてそう規則ばかりで融通が利かないのさ？ あんたら出てきて、子供を抱いていてあげなよ」

中年の保母は、李おばあちゃんを相手にしたくないと思ひ、

背を向け小声で懺悔老人と罵ると、その場を去っていった。残された古株と若い保母は、窓台に寄りかかりながら籠の中の赤ん坊をためつすがめつした。一人の保母が言った。「間違いく、あの田舎の少年が捨てていったんだわ。頭がおかしくなったんじゃない？ 自分の妹を捨てていくなんて」若い保母は言った。「子供はゴミじゃないんだから、自分の都合次第で捨てちゃいけないでしょ？ それに、たとえゴミだとしても勝手に捨てちゃいけないし！」古株の保母は、ふいに窓台を叩いて話を続けた。「ひょっとしたら妹じゃないかもしれない。あの田舎者の男の子は髭を黒々と生やしていたわ。どっかの女の子と間違いをしでかして、子供が出来ちゃってさ、どうしようもなくなつて抱いてここのまで来て捨てて、それで一件落着くということかもしれないわ」

李おばあちゃんは言った。「あんたらどうして無駄話なんかしてるんだい？ 誰の子であろうが、ここは幼稚園なんだろう？ 幼稚園は子供の世話をする場所なんだから、あんたら早く出てきて抱いてあげなよ。外は風がこんなに強いんだ、子供が病気になるらどうするつもりだい？」

二人の保母は、李おばあちゃんを冷ややかに見つめていた。そのうちの一人が、いくらか穏やかな口調で言った。「李おばあちゃん、分かっているわね。ここは幼稚園なの、児童福祉院<sup>⑥</sup>。

じゃないのよ。幼稚園には規則があつて、むやみやたらに子供を受け入れちゃいけないの。あんた自分でもちょっと考えてごらんさないな。もし、みんなが、いらない子供を窓の下に捨てていったとしたら、あたしたち幼稚園は大変なことになっちゃうでしょ？」もう一人の保母は、李おばあちゃんの無知ぶりに少し苛々して声を荒げた。「あたしたち三人で六つの手。それで数十人の子供の世話をしなきゃならないの。もともと忙しくて手が回らないのに、あんたはまだあたしたちを煩わすつもり！」

李おばあちゃんは言った。「あたしがあんたらに迷惑をかけただって？ 別にあんたたちにうんちやご飯の世話をさせるわけじゃない。小さな赤ん坊だよ。人にはあつたかい心があるはずだろうに、外は強い風が吹いているんだ、どうしてそこに突っ立って見ていられるんだい。意地でも出てこないつもりかい？」

保母が言った。「出て行っても受け入れられないの。分かつてないわね、ここでは子供を引き受ける時には手続きが必要なの！」

李おばあちゃんは言った。「あたしだってそれぐらいは知っているよ！ 手続きぐらい。先に赤ん坊を受け入れて、後で手続きをすればいいじゃないか？」

保母は苦笑いして言った「あんたに説明しても無駄だわ。こは日中だけ子供を預かって、午後には子供たちの両親を迎えに来るのよ。もし私が今この子を受け入れたら、午後、子供を誰に渡せばいいの？ あんただって解るでしょう？ この赤ん坊には両親がいないのよ！」

「両親がいない赤ん坊だからこそ可哀想なんじゃないか！」李おばあちゃんは地面に蹲り、赤ん坊のヒマワリ柄の綿入れ上着の中に手を入れて探ると、またその手を抜き、赤ん坊の額を軽く撫でて言った。「この子は病氣じゃないようだし、顔立ちも上品、立派な女の赤ん坊だよ。どうしてここに捨てられているっていうのに、誰もかまわてあげないんだい？」李おばあちゃんは、また淡い羊の臭いを嗅ぎつけた。彼女は鼻をクンクンさせ、その臭いが羊のものであると判断した。だが、彼女は全く違うことを窓台の方にいる二人の保母に告げた。彼女は保母たちに手招きして言った。「ちょっと来てごらん。この女の子、いい匂いがある。バタークッキーみたいな香りだよ」

二人の保母は賢明にも、李おばあちゃんの誘いには乗らなかつた。「子供の体の香りなんかうんざりするほど嗅いできたの。嗅ぎたくなんかないわよ」

李おばあちゃんは絶望して窓台を見つめ、ふいに冷たく微笑んだ。「人にはみな、あつたかい心があるなんて誰が言ったん

「だいたい？ 水のような心を持った人たちもいるんだね」

若い保母はついに堪忍袋の緒を切らした。「あんたは心があつたかいんでしょ、じゃあ、自分で抱いて帰るな！」こう言い残すと、彼女は幼稚園の窓をバンッと閉めた。

## 五

街の人々は、李おばあちゃんが小さな木製の荷車を引いて、よろよろと通りを歩いているのを見た。ある人が彼女に挨拶した。「李おばあちゃん、石炭の買い出しかい？」彼女は首を横に振って言った。「石炭は買わない、そんなの買うもんかい。

石炭を見るとあいつらの心を思い出しちゃうよ。今時の人の心は、石炭よりも黒いんだ」彼女の老けた顔には、やりきれなさや義憤の表情が残っていて、更に老けたように見えた。

正午、花坊鎮の人々は慌ただしい。李おばあちゃんが木製の荷車で運んでいる柳の籠の中に赤ん坊がいることに気付く人はほとんどいなかった。大多数の人は、籠の中にあるものは、彼女が脱いだ綿入れ上着だと思った。だが綿入れ上着の鮮やかなヒマワリ柄は人々の注目を集めた。街の人々は言った。「李おばあちゃん、若作りだね、大きな花柄の綿入れ上着で着飾るなんて！」

李おばあちゃんの小さな木製の荷車は、甥の張勝ジャンクの家の玄関前で止まった。張勝の嫁さんはセーターを半分はだけて赤ん坊を抱き、李おばあちゃんを迎えた。李おばあちゃんも腰を曲げ籠から赤ん坊を抱き上げた。「はやく、はやく、この子にお乳をあげて」と李おばあちゃんは言った。

張勝の嫁さんは赤ん坊に乳をあげながら、李おばあちゃんが幼稚園の保母たちがどんなに人情がないかを訴えるのを聞いていたが、彼女が関心を持っていたのは、この女の赤ん坊の素性のことだった。だが、あいにく、李おばあちゃんは素性については何も知らなかった。李おばあちゃんは、赤ん坊の口と母乳でパンパンになった張勝の嫁さんの乳房をじっと見つめながら言った。「たくさん飲ませてあげて、あんたは母乳が多くて、どうせ絞って捨てなきゃならないんだから」張勝の嫁さんは言った。「少しぐらいの母乳なんかどうでもいいけど、どうしてそんな気軽に街で赤ん坊を捨てたりしたの、今はB型肝炎が流行っているのよ、万が一……」李おばあちゃんは話の腰を折って言った。「万が一、万が一って、この子の顔色を見てごらんよ、白い肌から紅色が透けてるよ、どう見ても健康じゃないか？」張勝の嫁さんは、二人の赤ん坊の違いを探すかのようにベッドの上の自分の赤ん坊を何度も振り返って眺めた。しばらくすると彼女はゆっくりと赤ん坊の口から乳首を抜いた。「李

おばあちゃん、この子の体、なんだか臭いがしない？」彼女は言った。「どうして羊の臭みがするのかしら？」

李おばあちゃんは、ちょっとためらってから笑い出した。

「羊の臭みだって？ いい香りじゃないか。バタークッキーみたいな香りだよ」

張勝の嫁さんは乳をあげ終え、赤ん坊を籠に戻すと、点滴用の瓶で作られた哺乳瓶を見つけ、取り出してちょっと振ってみた。「赤ん坊のための乳が用意してあるじゃない。なんでわざわざ私の乳を飲ませるの」李おばあちゃんは言った。「半分ぐらいしか残ってないから、節約しながら飲ませなきゃ。しばらくしたら役所まで赤ん坊を届けなきゃならないけど、役所に乳があるかどうか分かりゃしないだろ？」張勝の嫁さんは自分の赤ん坊を抱きに行き、振り返って訊いた。「あとで赤ん坊を木の荷車で役所まで届けるの？」こう訊ねられた李おばあちゃんは不機嫌になり頂頂面になった。「あんたら若いもんときたら、共産党の教育は無駄だったのかい？ 誰かが捨てた子供だって子供じゃないかい？ どうしてみんな同じようなことを言うのさ？ あたしはもうこんな歳になってしまって、足も悪いし、話も下手で、役所のお偉いさんに話してもわかっちゃくれない。あんたら若いもんが届けないで、あたしに届けさせる気かい？」張勝の嫁さんは言った。「あなたに届けてもらおうなん

て言わないでしょう。どうしてこんな余計な世話を焼くのよ？」李おばあちゃんは怒鳴った。「これは余計なことなんかじゃないよ、赤ん坊のことなんだよ！」

なんといつても目上の人なので、李おばあちゃんが怒鳴ると、張勝の嫁さんは何も言い返せなくなり、子供を抱いて部屋の中をグルグルと歩き回った。「いずれにせよ、私は手が回らないわ。そのうち張勝がご飯を食べに帰ってくるから、届けるんなら張勝に行かせればいいわ」

## 六

木材置場で働く張勝は、正午に政府のビルにやって来た。タ イミングが悪く、ちょうど昼食後の休み時間だったため、花坊 鎮政府の五階建てビルは静まり返っていた。苦情検討委員会、 婦女連合会、計画出産指導グループの事務室は全て閉まっていた。だが、五階の事務室だけは彼の注意を引いた。その一室の 窓ガラスには新聞紙が乱雑に張られ、中から人の声が聞こえて くる。張勝は窓台上に上り換気口から中を覗いた。数人の役人た ちが輪になってトランプをやっている。役人の一人は鼻に細長 い紙を二枚張り付けていた。張勝は笑い出し、窓台から飛び 降りた。「こいつらも、こんなトランプ遊びをするのか」

彼が長い間、ドアをノックしていると、室内は静まり返り、しばらくして、やっと誰かが答えた。「どなた？」出てきたのはザボン色のスーツを着た女の役人だった。彼女は体を斜めにして、半分開いたドアの隙間から用心深そうに張勝を見た。

「今は昼休みなので、業務は行っていません」

張勝は彼女が婦女連合会の一員であることを覚えていた。

「婦女連合会は子供の世話をするんだろ」彼はぶつぶつ言いながら柳の籠を両手で持ち上げ、大げさな身振りで彼女に差し出した。「あんたらは昼休みだけど、俺は仕事に行かなくちゃならない。叔母が幼稚園の前でこの赤ん坊を拾ったんだ。政府へ届けてこいだってさ」

女性の役人は無意識に籠から身をかわし、驚いて言った。

「どこの子供？」

張勝は言った。「街に捨てられていたんだよ！」

女性の役人はまた金切り声で訊いた。「あんたはどこの人？」

張勝は柳の籠を地面に置いた。「俺は木材置場の革命的労働者だよ。なんだって俺をそんなに睨みつけるんだ？ 連れて来たのは子供だろ、爆弾を持ってきたわけじゃあるまいし！ 早く受け取ってくれよ！ 受け取らないならここに置いていくからな」

室内にいた数人も出てきた。そのうちの一人の守衛係は、張

勝のことを知っていた。彼は言った。「無鉄砲なやつなんだよ、こいつは。数年前、派出所によく来ていた前科者だ！」

張勝が逃げようとする、若い役人が突進してきて彼を引き留めた。「ここに赤ん坊を置いて行くな。子供の遊びじゃないんだぞ。調査して登録しなきゃならん」

張勝は言った。「何が調査だよ。道で金を拾った<sup>ホネ</sup>ら、あんたらに渡さなきゃいけないのに、子供を拾ったら政府へ渡しに来ちゃいけないのか？」

「屁理屈を並べるな、役所へ渡すにしても業務時間<sup>ゴト</sup>に來い。籠を持ってビルの下で待て。二時半になったら計画<sup>ケイ</sup>出産事務室に行<sup>ク</sup>って登録しろ！」

張勝は柳の籠を抱きかかえようとせず、密かに体を階段の方へ移動させていった。だが他の男の役人二人の反応は早かった。彼のもくろみを見破ると、ときぱきと二人でやって来て、柳の籠を張勝の懐に押し込んだ。それから、二人は彼を両脇から担ぐようにして一階まで降りていった。

張勝は一階の受付で五分ほど座っていたが、その間、ずっと悪態をついていた。門番の老人はやっとのことで何があったのかを理解したが、余計なことを言うのもどうかと思い、先ず、張勝にお茶を淹れ、タバコもすすめた。張勝は怒り心頭に達しており、お茶にもタバコにも目もくれず、ひたすら老人に柳の

籠を託そうとした。老人は言った。「俺はずっと独身で、子供の世話などしたこともない。そんな俺に、子供を渡すなんてあんまりじゃないか？」張勝は怒って窓の外を眺め、また老人を見やると、急に頑なで容赦のない表情を浮かべた。「あんたを困らせやしないさ」彼は言った。「俺は帰る、赤ん坊は外に置いていくぞ！」

老人は、張勝が外の花壇に柳の籠を置くのを目撃した。張勝は去り際に、赤ん坊に棉入れをしっかりと着せた。「そんなことをしたって無駄だ」老人は窓を隔てて張勝を監視しながら、堪え切れずに「この恥知らず！」と罵り、張勝にお茶を淹れてやったことや、タバコをやったことを後悔した。「この張勝って野郎は、大馬鹿者だ。仕事がどんなに忙しくたって、赤ん坊を花壇に捨てるなんて。赤ん坊だぞ、植木鉢の花じゃないんだ」

午後の太陽が政府のビルの外にある花壇を、清々しく照らしている。花壇の菊は満開なものと萎れたものが半々で、情熱的な太陽に対してどこかさっけない。それとは反対に、柳の籠は一本一本の枝が陽光を迎え入れ、淡い金色の光を放っているかのようだった。

最初、柳の籠に気付いたのは猫だった。どこかの家の猫がそそくさとやって来て、柳の籠の周囲を何度か回り、爪を籠の縁

に引っ掛けて頭を突っ込み、赤ん坊の匂いを注意深く嗅いだ。匂いが気に入らなかった猫は、籠の回りを何度かうろろし、最後はがっかりしてどこかへ行ってしまった。続いて犬がやって来て、楽しそうに花壇の方へ走っていった。食堂の料理長が飼っている犬だ。犬まで来たのを目にした門番の老人は、突進して行って犬を追い払った。「赤ん坊だぞ、魚や肉の骨じゃないんだ、おまえら畜生が騒ぐんじゃない！」

老人は窓越しに柳の籠を見守っていた。彼は女の赤ん坊が泣き出すのを待っていたが、いつまでたっても泣き出さない。赤ん坊の奇妙なまでの静けさを、老人は何度も訝しんだ。どうして泣かないんだろう。こんなに不運だっというのに、それでも泣かないなんて。この赤ん坊は口が利けないのか？ 老人は思った。もしそうならこの子を引き取ったら面倒なことになるな。道理でみんな無慈悲ってわけだ。

しばらくすると、ゴム縄跳びで遊んでいた二人の少女が、国旗のポールの下にやって来た。彼女たちはゴム縄の端をポールに結びつけたが、二人とも別の一方の端を持ちたがらなかった。先に跳びたいと口論していると、一人の少女が柳の籠を見つけ、相手をほったらかしにして花壇の方へ走っていった。するとすぐに、老人は二人の少女が驚き叫ぶ声を聞いた。「誰の赤ん坊？ 誰が捨てたの？ 悪い人が赤ん坊を捨てちゃったの

よ！」

老人は二人の女の子がゴム縄を引きずって受付所へ走って来るのを見ると、とたんに慌て出した。すかさずドアに鍵をかけ、部屋の方へ振り向いたが、隠れられる場所は簡易ベッドしかない。窮すれば通ずで、老人はベッドまで走り、靴を足で踏みつけて脱ぎ、掛布団をめぐり上げてベッドに潜り込んだ。その時、すでに門はパンパンと叩かれていたが、老人は聞こえない振りをして、掛布団で頭を覆い隠し、二人の少女を憎々しく思った。無知な女の子たちだ。赤ん坊のことで、なんで独り身の老人のここに来るんだ？ 俺は門番だぞ、子守りじゃない！

二人の少女が立ち去った後も、老人は布団の中に隠れたままだった。彼は起き上がれなくなってしまう。起きなくても大丈夫だろう。彼は壁掛け時計を見ていた。午後二時半になれば、役人たちがやって来る。その前に起きればいい。その頃には、すでに誰かが柳の籠を持ち去っているに違いない。窓の外では人の声がはじめ、打ち寄せる波のように受付所へ伝わってきた。どうやら少女の金切り声が近くの文化センターや衛生院の人たちを驚かせたようだ。老人は掛布団から頭を出し、窓の外を盗み見た。花壇の方では、人々が動揺しているようだった。ざわめきの中から、老人はふいに、赤ん坊のはっきりと響く泣き声を聴いた。それは他の赤ん坊と比べて何ら異常のな

いものだったが、老人の耳は痛痒くなった。彼は耳をほじくりながらホッとして呟いた。「泣けるんじゃないか、口が利けるんだ！」

午後二時十五分ごろ、老人はベッドを降りた。ずっと服を着たまま寝ていたので、老人は急に寒さを感じ、冬用の綿の上着をドアの後ろから取って羽織った。外の騒がしい声はすでに収まり、老人は窓辺から花壇を暫く眺めた。数人がまだそこで身振り手振りを交えて話に熱中していたが、柳の籠はすでに消えていた。人が多く集まれば、やはり暖かい心を持った人がいるもので、問題を解決してくれたのだ。老人は何とも言えない気分、綿の上着を羽織ったまま外に出ると、空気中にかすかな羊の生臭さが残っていると感じた。そのありやなしやの臭いは、盛りの過ぎた花壇の菊の香りを圧倒していた。老人はそれが柳の籠と赤ん坊の臭いであることを憶えていた。

食堂で働く数人の女の炊事係たちが、花壇の傍に立って柳の籠の行方について夢中で話し込んでいた。あの驚くべき情報も彼女たちが老人に伝えたものだった。彼女たちの一人が端的に言った。「気狂い、瑞蘭レイランが柳の籠を抱いていったんだ！」別の一人が詳しく補足する。「気狂い瑞蘭が柳の籠を奪っていったんだよ！ 奪ったんだよ。誰にも止められなかった。自分の赤ん坊だって言うんだよ。あの女の娘は渾水河で溺れ死んだってこ

とは花坊鎮の人なら誰だって知っているのに、自分の娘だなんて言い張ってさ！」

老人は開いた口がしばらく塞がらなかったが、ふいに大声で叫んだ。「あの女は気が狂っているんだぞ。あんたも気が触れてしまったのか？ どうしてあの女が赤ん坊を奪っていくのを黙って見ていたんだよ。気が狂った奴がどうやって赤ん坊の世話をするんだ？」

いつも温厚だった老人が急に奇妙なほど激昂したので、炊事係の女たちは彼を慰め始めた。「そんなに余計な心配をしなくて大丈夫よ。瑞蘭は赤ん坊を連れていけないから。兄の瑞昌も傍にいたのよ。瑞昌が、妹の気持が静まるのを待って、赤ん坊をしかるべきところへ送るんだって言っていたわ、だから彼が自分で責任を取るわよ！」老人は言った。「よく気軽にそんなことが言えるな、あいつが責任を取るだって、神仙だって赤ん坊の素性を知らないっていうのに、あいつは赤ん坊を一体どこへ届けるつもりだ？」炊事係の女は言った。「河の対岸、楓楊樹郷よ」老人は腑に落ちない。「なぜ赤ん坊の両親が楓楊樹郷にいると言い切れるんだ？」その炊事係は言った。「まだ分からないの、田舎者って男尊女卑でしょ、女の子が生まれたら捨てちゃうのよ！」もう一人の炊事係の女がすかさず無遠慮に話の腰を折った。「あんたは、さっき、ここにいなかったくせに、

口から出まかせを言うんじゃないよ、対岸の田舎者に聞かれたら鋤でたたき切られちゃうわよ！」見たところ、彼女が状況を把握できているようで、彼女の話は、老人をより信用させた。

「もともと半ずる式の考え方でさ」と彼女は言った。「衛生院で注射を打っている小陸もさっきここに来ていてさ、赤ん坊が楓楊樹郷の出であることを明らかにしたの。小陸は柳の籠の中にあつた哺乳瓶に見覚えがあつてさ」その女の炊事係は続けた。「あんたたち、あの点滴用の瓶を見たでしょ。中には、瓶半分の羊の乳だつて入っていたわね。楓楊樹郷の女たちは衛生院に来て点滴用の瓶を盗んで家に持ち帰り、哺乳瓶として使いたがるんだって！」

## 七

柳の籠が夜の闇に紛れて羅文礼家の羊囲いに舞い降りた。

翌日の朝、蘆杏仙は起床して羊囲いに入るや否や、柳の籠が戻って来ているのを見つけた。「柳の籠がまた戻って来た！」蘆杏仙は慌てふためいて叫ぶと、自分の家の羊囲いがすでに何者かによって密かに迷宮に作り変えられてしまったと、ふい感じた。迷宮のような羊囲いは、半分明るく、半分暗い。羊は暗い場所に隠れていたが、柳の籠は大胆に朝日を浴びていた。蘆

杏仙は足音を忍ばせて近づいていった。ヒマワリ柄の綿入れ上着はまだ籠の中にあつたが、女の赤ん坊の姿はすでになかつた。彼女は肝っ玉を大きくしヒマワリの綿入れ上着を撫でてみた。

綿入れ上着はすこし湿っていた。夜露の、なかなか乾かない湿り気のために、手がぬめぬめする。蘆杏仙は夫の名を叫び始めた。「文礼、文礼、早く来て、羊囲いに幽霊が出た！」だが勤勉な羅文礼はすでに田を耕しに行っていた。彼女は囲いの門のそばまで逃げ、振り返って柳の籠を眺めると、また大声で息子を呼び始めた。「慶来、慶来、早く起きて、あんた一体あの赤ん坊をどこへ届けたんだい。どうして赤ん坊を届けたのに、籠がまた戻ってきたんだい？」

ほどなくして、蘆杏仙は羊囲いに子羊が一頭増えていて、隅っこの方で怯えながら立っていることに、ふと気付いた。昨晚草をやった時には、やはり三頭だけだったはずなのに、朝起きたら一頭増えていて。あまりの驚きに、蘆杏仙は自分の眼がかすんでしまったのではないかと疑った。彼女は母屋へ向かって叫んだ。「慶来、慶来、早く起きて、あたしの眼、どうかしちやっただみだだよ。羊が何頭いるのか、はっきり見えなくなっちゃまった！」

慶来は短パンを穿くとすぐに外に出てきた。彼は柳の籠を見ると、びくびくしながら母の方を振り返った。そしてまた羊を

見に行くと、顔色が急に変わった。彼は指で羊を数えて言った。「一頭多い。夏の頃と同じで、四頭になつて」慶来は近づいていってその子羊の角を引張ろうとしたが、伸ばした手を再び戻し、振り向いて母に言った。「母さん、怖がらなくてもいいよ、俺、この子羊に見覚えがある。夏にはぐれてしまったあの羊だよ。帰って来たんだ」

蘆杏仙は言った。「あんた、まだ夢の中かい？ 羊は犬じゃないんだよ。帰り路を忘れたりほししない。もし生きてたらとくに帰ってきてるよ。さあ、よく見るんだよ、一体どの家の羊なんだい、なんだってうちの羊囲いにやってきたんだい？」

慶来は蹲り、地面に唾を吐くと、どこからともなく飛んできた子羊を真剣な眼差しで見つめ始めた。しばらくすると、すべての恐怖や疑念が吹き飛んだ。「おまえは羊だ、俺が羊を怖がるか？」彼はそう大声を立てると、ためらうことなく手を前に伸ばし子羊の頭を抱きかかえ、彼自身の頭をグルグルと回して子羊をよく見ると、急に叫び出した。「母さん、はやくこっちに来て、泣いてる、羊の瞳、湿ってる！」

蘆杏仙は天秤棒で息子の尻を叩いた。「あたしはもう驚いてわけがわからなくなってるんだよ、おまえ、まだあたしを驚かすのかい？ 羊がどうして泣くんだよ。あたしは数十年も羊を飼ってきたけど、羊が泣いたところなんか一度だって見たこと

ない。泣くのは牛だよ！」

慶来は言った。「母さんを驚かしているわけじゃないよ。この羊の瞳は特別だ。こっちに来て自分で見てみなよ！」

蘆杏仙は近づいていき、息子の肩を手で押さえながら、子羊の瞳を見た。それは涙の光で覆われているかのようだった。

「どこの家の羊だい？ どうして泣いているのさ？」蘆杏仙は大声で叫び出した。「天上にいらっしゃいます菩薩観音様、我が家が羊を大切にしているのを見てくださいよ。我が家では、人がお腹一杯食べられなくても、羊のお腹はいつだって膨らんでいたんです。どうして我が家の羊困いに幽霊が出たりするのでしょうか？」

慶来は母親のように狼狽えなかった。その日の朝は、彼の冷静さと聡明さのおかげでうまく乗り越えられた。慶来は、壁の明かり取りの下にある柳の籠を一目見て、また羊をちょっと見ると、急に身震いし、大きなくしゃみをした。

蘆杏仙は言った。「風邪をひいたのかい？ 服を着て、また戻っておいで。羊を外へ連れていっておくれよ、どこの家の羊なんだい？」

慶来は、母の顔を茫然と見つめながら言った。「母さん、もう子羊を追い出すのはやめなよ。どうせ追い払えないから。全部、母さんのせいだよ、母さんが、昨日あんなことを言ったからだよ！」

蘆杏仙は言った。「あたし、なんか間違ったことを言ったかい？」

「母さん、昨日、この赤ん坊が羊だったら養うって言っただろ、そんなこと言うからさ！」慶来は言った。

「あんたって子は、いったいどうしたんだよ、なんだってそんなにわけがわからないことを言うのさ、いつまで寝言を言ってるんだい？」蘆杏仙は言った。

慶来はしばらく沈黙した後、蘆杏仙を引っ張っていった。羊困いの外で、その日の朝に昇った太陽の下で、少年羅慶来は、楓楊樹郷の歴史上最大の秘密を母に伝えた。「母さん、怖がらないで聞いてくれよ。あれは夏にはぐれた羊じゃないし、ほかの家の羊でもない。怖がらないで聞いてくれよ。母さんが言っただけのことだから、あの赤ん坊は我が家を目指して、また帰ってきたんだ！」

- (1) ×。原文も同様。  
 (2) 一分錢。中華人民共和国の通貨單位。元の百分の一。  
 (3) 購買販売協同組合。中華人民共和国初期に成立した、農村における商品流通を支えるための共同組合。  
 (4) 叔母。原文は「三姨」。母方の三番目の妹を指す。  
 (5) 李おばあちゃん。原文は「李六奶奶」。父方のお婆さんの六番目の妹。  
 (6) 兒童福祉院。原文は「兒童福利院」。主に孤児、捨て子、身体

- に障害のある子供を扶養するための社会福祉事業機関。  
 (7) 鼻に細長い紙を二枚張り付けていた。トランプの罰ゲーム。負けた人の顔や鼻に細長い紙を張り付け変な顔にする。  
 (8) 革命的労働者。文化大革命時期に、農民、労働者、兵士などの前に革命的と付けることが流行した。  
 (9) 衛生院。医療、予防医療、健康教育、計画出産等の指導を行う政府機関。

解題

一 作者紹介

蘇童（一九六三）は、現代中国を代表する作家の一人である。蘇州最北端の都市と農村の境界にある小さな通りで育った。文革期に姉は下放するが、蘇童はその経験がない世代である。一九八〇年に北京師範大学に入学し、創作を開始。J・D・サリンジャーの影響を受け、少年が読者に語りかけるような文体で描かれた「桑園の追憶（桑園留念）」（八七）や、モダニズム、ポストモダニズムの觀念と技巧を吸収しながら描かれた「一九三四年の逃亡（一九三四年的逃亡）」（八七）などで注目を集め、先鋒派作家の地位を確立。「妻妾成群 紅夢（妻妾成群）」（八九）が、張芸謀（ジャン・イーモウ）

監督によって「紅夢（大紅灯笼高高掛）」と改題、映画化され、第四回ヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞を受賞。その他、代表作に「女人行路（婦女生活）」（九〇）、「紅おしろい（紅粉）」（九一）、「米」（九一）、「碧奴 涙の女（碧奴）」（〇六）、「クワイ（茨菰）」（〇七）、「河・岸（河岸）」（〇九）、「黄雀記」（一三）などがある。

二 毛沢東と赤ん坊

この作品の時代背景は、「少年たちは（中略）バチを高く振り上げ『毛主席、万歳！』と声を揃えて叫ぶ」、「塩壘の上にある小さな赤旗」、「俺は木材置場の革命的労働者だ」等のくだりからみて、文化



### 葵花朵朵向太陽

(沢山のヒマワリが太陽に向かって伸びてゆく)

人民が毛沢東のおかげで幸せに暮らしているという意味が込められている。

[http://www.997788.com/pr/detail\\_152\\_20734593.html](http://www.997788.com/pr/detail_152_20734593.html)

(2018年5月23日閲覧)

大革命期だと判断できる。また、ヒマワリ柄の綿入れ上着でくるまれた赤ん坊の「真っ黒な腫がふいに開き、陽の光を迎え入れたが、照らされると怯えたように腫を閉じた」というくだりは、明らかに、左図のようにヒマワリ(＝人民)と文化大革命期の毛沢東のメタファーとなっていると言えるだろう。つまり、ヒマワリ柄の綿入れ上着をまとった女の赤ん坊とは人民を象徴するものであり、「陽の光を迎え入れたが、照らされると怯えたように腫を閉じた」というくだりは、人民と毛沢東の歴史的関係のメタファーとなっているのである。また、図の中にある『葵花朵朵向太陽』とは、一九六九年四月に開催された中国共産党第九回大会の頃、つまり毛沢東個人崇拜が最も高まった頃に、毛を熱狂的に賛美する人民たちによって繰り返し合唱された歌の一節である。

女の赤ん坊は、先ず、肉親に捨てられ、次に、羅文礼家の嫁であ

る杏仙、兄の慶豊、弟の慶来、幼稚園の保母たち、李おばあさん、張勝とその嫁、政府の役人たち、門番をする独身の老人、更には、猫、犬、縄跳びで遊ぶ少女たち、気狂い瑞欄、その兄の瑞昌、衛生院の小陸へと、数時間の間に次々と盪回りにされてしまう。つまり、本来は赤ん坊を未来の宝として育まなければならぬはずの社会や政府に、お荷物扱いされて捨てられてしまったのである。その結果、それらは決して泣くことのなかった赤ん坊は、「はっきりと響く声」で、ついに泣き出してしまふ。

再び羅文礼家の羊囲いに戻された赤ん坊は、杏仙の「この子が羊だったら引き取るさ！羊は草を食べるから、お金もかからないし食糧を分けなくてもいい」という心ない言葉に従うかのように子羊に姿を変え、「隅っこの方で怯えながら」涙を浮かべて立ち尽くす。道德観が麻痺し、イデオロギーが猛威を振る社会においては、人間であることを止めなければ自分の居場所さえ得ることができなかつたという意味にもとれるこの「変身」は、上述したように赤ん坊が人民を象徴していることと合わせて考察すると、文化大革命の熱狂の中で、親類や友人を告発し殴打することさえ平気で行った人民たちの狂気と悲劇、その後遺症による人間性や道德の退廃のメタファーと解釈することもできるだろう。涙を流す子羊とは、まさに涙を流す人民のことではないか。

作品の最後において、慶来は子羊の涙によって「冷静さと聡明さ」を取り戻し、無慈悲な母を諫め、子羊を養うことを勧める。ここから、当時のイデオロギーに染まりきっていなかったと考えられる若者たちへ託された期待、つまり道德観や人間性の回復という啓蒙的なテーマを読み取ることもできるだろう。

テキストにおいて、涙を流す子羊は「夏に川辺で離ればなれになった一頭の子羊」なのか、それとも赤ん坊が「変身」したもののなの

かについては、あくまでも慶來の主観的な見方しか示されておらず、明確になっていない。このことが、テキストに空所を作り、読者に余韻を残す。更に、その空所が、杏仙の「幽霊が出た」等の言葉と

繋がることで一種の神秘的な怪談のような雰囲気テキストに生み出している。以上のことも、この作品の魅力を支える要素の一つとなっていると考えるだろう。

(さいとう はるひこ／博士後期課程)